

平成 30 年度 東京都内湾水生生物調査 7 月稚魚調査 速報

●実施状況

平成 30 年 7 月 12 日に稚魚調査を実施した。天気は曇後晴で、気温 29.2～30.8℃、調査地点の風は弱く、海は静穏であった。調査当日は大潮で、干潮が 10 時 18 分、満潮が 17 時 14 分であった(東京都港湾局のデータ)。

5 月 1 日に実施した稚魚調査では、スズキ、マハゼの稚魚が多く採取されたが、今回の調査では、いずれの地点においてもこれらの個体数は少なくなっていた。採取された個体の全長は 5 月に比べ大きくなっていったことから、多くが成長と共に深所に移動したものと考えられる。

2018/7/12	城南大橋	お台場海浜公園	葛西人工渚
作業時刻	10:28-11:41	9:01-9:59	12:45-14:00
水温(℃)	27.7	27.8	29.3
塩分(-)	17.6	21.4	6.9
透視度(cm)	27	25	35
DO(mg/L)	9.4	9.4	7.6
DO飽和度(%)	132.2	134.8	104.0
波浪(m)	0.1	0.0	0.1
pH(-)	7.8	8.2	8.0
水の臭気	下水臭(弱)	無臭	無臭
備考	上げ潮時に調査を行った。	下げ潮時に調査を行った。 気温が高いためか、公園の渚を利用する観光客は少なめであった(10 名程度)。	上げ潮時に調査を行った。 汀線付近の浅瀬で、大型のアカエイを目視で確認した。 干潟上では、ウミネコやカワウが休息していた。

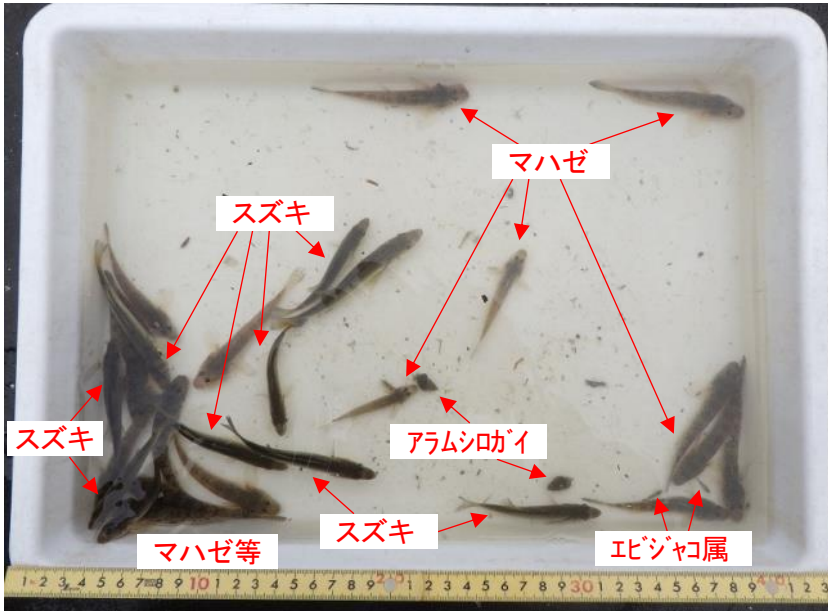
●主な出現種等 (速報のため、種名などは未確定)

主な出現種等	城南大橋	お台場海浜公園	葛西人工渚
魚種 (多い順 ^注)	スズキ(+)	スズキ(+)	コノシロ(c)
	マハゼ(+)	キチヌ(+)	マハゼ(c)
	ナベカ属(稚魚)(r)	ヒメハゼ(+)	ビリンゴ(c)
	コノシロ(仔魚)(r)	マハゼ(+)	エドハゼ(c)
		ビリンゴ(r)	マルタ(+)
魚類以外	ニホンイサザアミ(m) エビジャコ属(+)	エビジャコ属(+) ユビナガホンヤドカリ(+)	ニホンイサザアミ(G) シラタエビ(+)
備考	他にアラムシロガイ、アサリが採取された。	他にボラが採取された。	他にメナダ属が採取された。 ニホンイサザアミが大量に採取された。

注) 表中の () 内の記号は大まかな個体数を表す。

G:1000 個体以上、m:100~1000 個体未満、c:20~100 個体未満、+:5~20 個体未満、r:5 個体未満

城南大橋 採取試料



城南大橋西詰めにある干潟。大潮の干潮付近に調査を行い、5月よりもやや広い干潟がみられた。

●主な出現種等

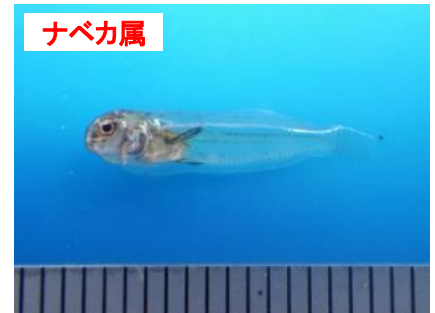
※写真のスケール 1目盛:1mm



東京湾を代表する魚のひとつ。ハゼ科稚魚や甲殻類を食べながら急速に成長し、1年で20cm程度になる。成長に伴いセイゴ、フッコ、スズキと呼ばれる出世魚。採取された個体には、大きさに違いがみられた。



東京湾を代表する魚のひとつ。内湾や河口域の砂泥底に生息する。稚魚は、初夏から秋にかけてゴカイや甲殻類を食べ成長し、徐々に深所へと移動する。採取された個体には、大きさに違いがみられた。



河口付近や沿岸の岩礁域に生息する。産卵期は5~7月で、ふ化した仔魚は湾全体に分散する。採取されたものは着底後の稚魚。東京湾におけるナベカ属は、ナベカ、イダテンギンポ、トサカギンポが知られる。



内湾の干潟に生息する巻貝である。死んだ生物の肉を食べる(腐肉食性)ことから、『海の掃除屋』などと呼ばれる。

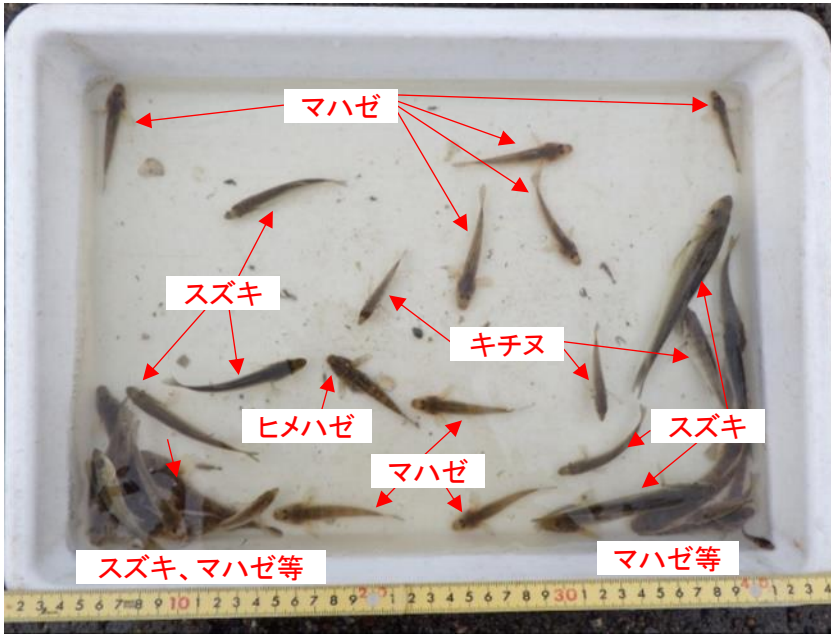


潮干狩りなどで盛んに獲られている代表的な二枚貝である。東京湾のものは殻の高さが低くて、模様のコントラストが強いものが多い。



河川の下流域から海域の潮間帯に生息し、礫や石の下に潜み、ミズのようによよよと動く。ゴカイ類やヨコエビ類を食べている。干潟上の礫の下の水たまりで確認された。

お台場海浜公園 採取試料



調査地点の様子



調査の様子

水際数メートルで急に深くなる人工の渚。

●主な出現種等

※写真のスケール 1 目盛:1mm



キチヌ

沿岸の岩礁域や内湾の砂泥底などに生息する。クロダイに似るが、腹鰭、臀鰭、尾鰭の下方部が黄色い。産卵期は、キチヌが 10～1 月、クロダイが 3～6 月と異なり、干潟域での両種の出現時期が異なる。



ヒメハゼ

全長は 9cm 程度になる。内湾や河口域の干潟域の砂底や砂泥底に生息する。危険を察知すると砂に潜る習性があり、体の模様も砂や砂利の色にそっくりである。



ビリンゴ

河口付近の干潟域で仔稚魚が 3～5 月に大量に発生する。稚魚が成長するにつれて河川上流側に移動する。早春にアナジャコ等の甲殻類の巣穴に産卵する。



ボラ

内湾の干潟域では最も個体数が多い。比較的表層を遊泳し、跳びはねる姿が多くみられる。干潟域には、早秋から夏にかけて滞在し、徐々に成長する。5 月調査時に比べ、金属光沢は弱まり、体に厚みが増している。



エビジャコ属

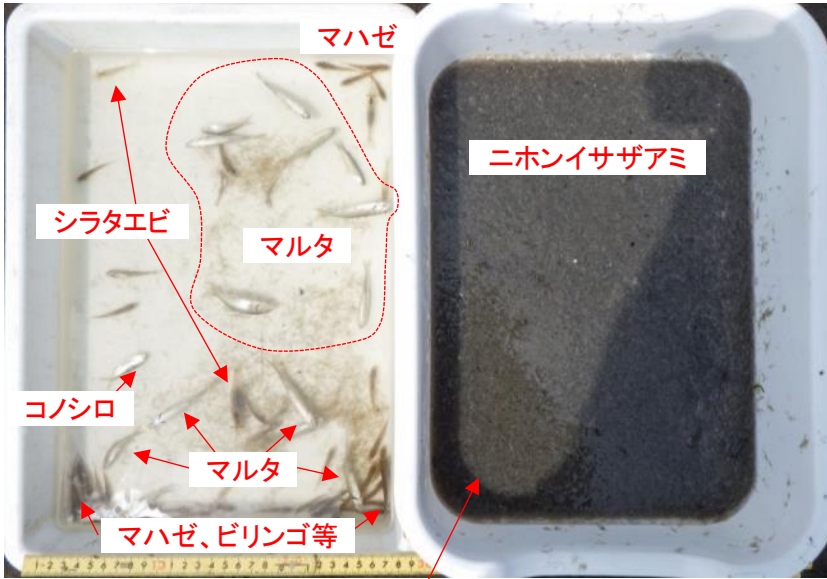
内湾の砂泥底に生息し、普段はごく浅く潜って隠れている。体色は周囲の環境に合わせて変化する。魚類の稚魚などを捕食することが知られている。



ユビナガホンヤドカリ

東京湾の干潟では、普通にみられるヤドカリである。潮間帯から浅海域にかけて生息する。『海の掃除屋』的な役割も果たしている。

葛西人工渚(東なぎさ) 採取試料



東京湾奥にある広大な人工干潟。東なぎさは一般の立ち入りが禁止されており、野鳥の楽園となっている。

●主な出現種等

※写真のスケール 1目盛:1mm



汽水域に生息するアミの仲間(エビの仲間でない)。河口域で春に大量発生し、魚類等の餌として重要であるほか、佃煮やアミ漬として、人間にも利用されている。



東京湾を代表する魚のひとつで、内湾や河口域に生息する。産卵期は春から初夏で、ふ化した仔魚は内湾の干潟域などの浅所でもみられる。江戸前寿司のコハダは、10cm 程度に成長した本種のこと。



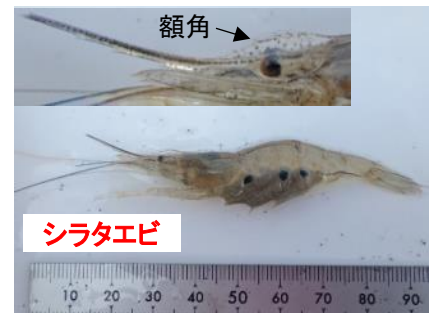
河口付近の干潟域では、4月下旬から5月上旬にかけて体長 1~2cm 程の稚魚が大量に出現する。干潟域には梅雨時から秋までの期間、体長 5~15cm 程になるまで滞在する。



湾奥から湾中央にかけての干潟域では、夏から秋に体長 2~10cm 程の個体が採取される。東京湾におけるメナダ属は、セスジボラ、コボラ、メナダ等が知られる。



湾奥の干潟域に生息し、アナジャコ(Anzako)の巣穴がある砂泥地を好む傾向がある。アナジャコの巣穴を隠れ家として利用している。小型の甲殻類を食べる。



汽水域に生息し、スジエビ類よりも大型で、体長 7cm 程になる。触角が青く、額角(がっかく:頭の上面のトゲ)がトサカ状に盛り上がる。